白鳥の会20年を顧みて・出合いから
―浜頓別町、クッチャロ湖―

山内　昇

この度20年記念誌発刊にあたり、原稿提出の依頼があり、もう20年も経ったのか、歳月の早さに驚きながら、さて何を書いてみようかと己に愚問し、日本白鳥の会設立からの歩みをちょっと、私なりに顧みた。まず会が誕生してから多くの会員、役員様の物故者に対し深甚なる哀悼の誠を捧げる。

私はクッチャロ湖で勤めの傍ら昭和38年以来白鳥の観察を行っていた。その頃は早春３月頃には多数の白鳥が氷上で、カラス、ワシ類、キツネなどに捕食されているのを観察した。何故死亡するかも知らずただ傍観するのみだった。40年の春台地で湖の氷上を対岸から牧草を馬橇で運搬して来る様子を観ていたら、馬橇からこぼれ落ちる牧草が風で拡がり、その干草を白鳥が食っている様子を観て、やっぱり氷上では何も食う物が無い事に気付き先ず餌付けを試み様にも白鳥は何を食うのかも知らず、新潟県では茶ガラを与えて良く食べていた話を聞き、最初の頃は職場などで茶ガラを集め乾燥させ野菜屑などと混ぜ合わせ与えたが氷上で人が白鳥に近付く気配がすればすぐ逃げる。ただ氷の上に茶ガラ混りの餌を捨て来る様な事を何年も繰り返した。昭和45年の春、南西の風強風時に飛べない白鳥の一群の中の数羽を捕えて体重測定をした。何れの白鳥も３キロ台で痩せこけていた。この一群の寝た跡には一個の糞さえ観られずやっぱり何も食べて無い事を物語っていた。この折に背負って行った「リュックサック」に詰めた妻と二人分の餌を、この位置に撒(ま)いて来た。翌日この位置には一粒の餌も無く、糞が多く観られ、よくぞ白鳥さん食ってくれたと氷上で歓喜(かんき)した。これがクッチャロ湖での餌付けの第１号であった。その後は氷を切り流し水面を確保して安全な場所を造ってやり、水面に餌を与えるが白鳥とは仲良くなれない「何でクッチャロ湖の白鳥は人馴れしないのかな」道内各地でも人工給餌による保護が行き届き、人と白鳥との共生している話を聞き白鳥の飛来地を訪問した。どこの飛来地もオオハクチョウであった。私のところではコハクチョウ、この種の違いが人馴れできない差異なのか、と自問しながらの給餌の日々であった。

この年、4月下旬に松井先生に湖畔でお会いできた。（後に日本白鳥の会々長となる）先生は、未明に飛去（北帰行）する白鳥を撮影し終え、種々話しをしている内に日本各地を撮影に訪れているが各所で色々と苦労しながら白鳥の保護に関っている人が多い。私も初対面の先生に自宅にまでお出でを頂き白鳥談義をする。各地を訪れてみてそれぞれの苦労話や、白鳥の保護をいかにすべきかと悩んでいる人が多い。「いずれの人も白鳥が好きで好きで堪(たま)らない人達ばかりなんだ。明年あたりを目処(めど)に一同集う機会を作る予定でいる。もしよければ参加しないか」との話一、二も無く是非、加入したいと申したのが、白鳥の会に入る動機であった。そして昭和48年６月、日本白鳥の会設立総会が東京で行なわれ、初代会長は新潟県の故家田三郎先生であった。南は島根県、北は北海道最北の浜頓別から。いずれの方々も白鳥に対する愛情は人後に落ちない人ばかり。設立総会であるので、席順は決っていた。北海道からも道東、道央、道北の白鳥の飛来地からの出席であった。自己

〒098－57 枝幸郡浜頓別町15－４

紹介も観察地の湖沼、河川、白鳥の種類、羽数と特に本州の人たちは「俺の白鳥」と言う人だけあって、こと細かい紹介で時間も持時間以上にオーバーになり、事務局より注意される1コマもあった。北海道の人たちはいたって簡単であった。聞き方によっては北海道の人は不勉強の様にも思われた。勿論、私の出番も来た。「北海道浜頓別町、クッチャロ湖と言う湖で、飛来するコハクチョウの数は4千羽以上です」と自己紹介すると、「えっ」と言う声がした。本州の人たちは、コハクチョウは北海道などに中継しないと思っていたらしく、何を言っているのかと思ったらしい。「まして聞いたことも無いクッチャロ湖で…」と言われた。休憩時間に何人かの人達と話し合ったが、皆さんコハクチョウは北海道から渡来していると思いたくなかったらしく、私の言うことは多数の人は眉唾(まゆつば)だよと言わんばかりであった。山形県、福島県、新潟県の方たちは「俺の所のコハクは朝鮮経由で来るんだ」と力説していた。その様な白鳥の会誕生時の謎(なぞ)めいた話も、4年後は全て標識付作業で学術的に問答無用と言うふうに解決した。昭和50年4月14日クッチャロ湖において「001y」コハクチョウ第1号の標識放鳥を行った。この「1y」は当年冬期本州各地で多くの会員が観察して、便りや写真などを頂いた。その後クッチャロ湖では多くのコハクに標識放鳥を行ったお陰で、各地の会員から情報を頂き、日本白鳥の会々報などにも掲載して頂いた。特に島根県の故門脇益市氏とは秋期の渡来期には中海の様子やクッチャロ湖の現状などを長電話したものであった。白鳥が可愛くて可愛くて堪(たま)らないと言う方だった。福島県の故上竹二郎氏とは種々想い出も多く、お便りを頂戴する度に便箋に透き間が無いほど美しい文字で書き認(したた)められ、特に標識鳥についてはひと冬の様子と近隣県に移動した様を手に取る様に記録し報告頂いた。その中でも「022C」は赤首環を付け'77年8月19日チャウン湾で放鳥。同年11月5日より越冬したこの白鳥は種々楽しい記録を残してくれた。標識放鳥後三年目の春、3月16日に上竹氏より「今朝6時過ぎ20羽ほどの群と「022C」が飛立った。これで阿武隈川の白鳥は0羽になりました」との電話だった。クッチャロ湖では未だ大半が結氷の中におり、2千羽余が各地から集結中だった。夕方給時の午後4時に向岸に「022C」の赤首環が氷上で休んでいる姿を確認できた。福島県と浜頓別まで直線距離で図面上でも850kmもある。朝6時出発、クッチャロ湖着夕方3時とすると滞空時間9時間で飛来した事になる。時速94kmほどで飛来した事になる訳だ。日本ではこの標識鳥の記録が最初だ。この様な記録を残したのも白鳥の会結成の賜ものだと思う。何よりもこの会の会員以外でもクッチャロ湖に訪れる鳥類関係者も年々多くなっている。故上竹氏も「8850kmを一日で渡れる湖とは、どんな湖なのか」と、奥様と同伴で来町を頂いた。湖からは白鳥も全て渡去した初夏であったので、サハリンの島影の見える北オホーツク海岸を稚内まで案内し途中ポロ湖、猿骨沼と白鳥の中継地、猿払村のホタテ御殿など案内しながら稚内で別れた。今一度白鳥の飛来時に観に来たいとおっしゃっていたが、これが最後となった。後に病床からも奥様の代筆で近況を知らせて来ていたが再起なされぬまま白鳥の夢を見つつ天国へ召されたそうだ。考えて見ますと十年一昔とのことわざの様に二昔にもなる訳で、発足時に御教授を頂いた先輩諸氏に申し訳無いが、あの人が、この人がと思う人たちが他界の報に接する折に、白鳥の会も己れを含めて若返りの時代なのかも知れない。白鳥の会設立時に「クッチャロ湖に4千羽以上のコハクチョウが飛来する」と私が発表した時に「えっ、まさか」と言った方々にも、会と言う皆んなの力、観察機械の開発など大勢の人たちによる定時観察などにより、確な種別の確認など、点から線につながったことや諸先輩各位のお蔭で海外との交流など個人では成し得

ない大事業も行なわれた。

現会長には公私共御多忙な折にも関わらず、悲願でもあった、ＩＷＲＢ日本委員会に参加し国際白鳥会議開催を提案したが、難題が多くてと申され、白鳥の会は産声を上げたが会としての歴史も財力も乏しく不可能に近い状態の中から、会、誕生７年目の昭和55年２月18日から22日まで札幌市北方圏センターにおいて、常陸宮、同妃殿下の御臨席を賜り、ＩＷＲＢの国際会議第26回代表者会議、と白鳥と鶴のシンポジウムが開催された。内外からの専門家による種々発表に、何を聞いても新鮮であった。20日のエキスカッションではウトナイ湖ではオオハクチョウの標識付を見学し24日には尾岱沼で山階鳥類研究所員と、スレードン教授による白鳥の標識作業の実技指導が行なわれた。スレードン教授による雌・雄の見分け方は本当に勉強になった。目の前の白鳥より知らなかった私には驚きの連続でもあった。何よりも会議を通して海外の自然保護のあり方、我が日本は経済成長期に失って行く自然をいかにして保護すべきか、を考えさせられた。コウノトリやトキを失なっても米を作る時代、もう終わりにしよう。この札幌でのシンポジウムを終えた年の日本は、ラムサール条約に加入する。日本は偶然に加入した訳ではない。白鳥と鶴のシンポジウムに参加した釧路地域の多くの皆さんの熱意の賜であり、釧路湿原はラムサール条約第１号指定になり、後に湿原国立公園指定ともなる。クッチャロ湖も同年６月、ラムサール指定に名乗りを上げるが、農業開発（天型草地造成）途中のため、地域住民の理解を得る事が出来なかった。その後昭和60年、宮城県の伊豆沼、内沼も登録され、平成元年クッチャロ湖も登録湿地となる。クッチャロ湖もラムサール指定に手を上げてからやっと10年目に日の目を見たが湖の環境を考える時、この時差は大きい。以前は12月から３月まで、湖面が全面凍結するため白鳥は南の越冬地で暮していた。近年は湖は結氷しない。それは河口の改修が行なわれ、河口が60ｍから150ｍと拡幅されたためである。クッチャロ湖に通じている川は勿論、凍結しない湖に流入する海水の逆流が激しく干潮、満潮の差も40cmから90cmと増えた。湖の塩分を測ってみると海岸では2.9～3.0％。クッチャロ湖では3個所で測定した。0.2、2.6、2.9％と海水とはあまり変らない。湖の白鳥の餌となる淡水性の藻類の退化が著しく、秋期の渡鳥の餌さえ不足している。近年冬期間でも湖は流氷の接岸して河口が塞(ふさ)がるまで凍結しないため、白鳥は真冬でも残っている。数も１千羽以上が河口に湖面に集っている。寒中の海水さえ凍る日には、湖も凍結し、白鳥も餓死さえする。水を割り人工給餌で保護をせざるを得ない。やっぱり厳冬期には温暖な地方へ移動する様に望むが、白鳥には理解できない。もし55年初期にラムサール条約の重要性を認識していたなら、河川や河口の改修工事などには特段の考慮を関係者は行ったものと思う。秋期10月中旬渡来した白鳥は凍らない湖に厳冬期でも居座るため、春５月末まで延べ８ヶ月間も白鳥を観られる地域になった。数についても近年は、２万羽近くが春期には中継する、この事は決して喜ばしい事ではない。それは開発と言う名の元に湖沼湿原は大きく減少しているため、水鳥たちは採餌場の不足からクッチャロ湖に大集結するものだと思う。以前は集結した白鳥は隣のポロ沼へと移動し、４月下旬頃に北帰行したものだが、近年ポロ沼もシジミ貝の養殖場として水中ブルドーザーによる開墾をしてから、白鳥は採餌場として集結しなくなった。途中、避難沼程度にしか使用しない。一度環境を変えると白鳥たちも良く知ってて居るのだ。近年はクッチャロ湖に集結する白鳥は４月初旬頃小群で飛去する。サハリンへ帰北する中に標識鳥をマークする。飛行コースは真北「サハリンのアニワ」朝８時クッチャロ湖出発。中に「023C」の赤標識が入ってい

る、合計16羽の小群である。北帰行確認のため、ポロ沼、猿骨沼、調査、両沼とも0羽。連中はサハリンへ飛去を確認する。クッチャロ湖で再度確認があるが不明。こんな早くサハリンへ行ってもアニワの干潟はまだ、凍っているのではと考えていた。クッチャロ湖だって、3割ほどしか水面が開いてないのに、と案じている。午後3時頃、真北の方角から一群の飛来を確認する。この時期は南方からの渡来が多いが、北からは全く無い。もしやと思い、目を離さず観察する。白鳥舎前の水面に着水する中に「023C」の赤首環も混っていた。やっぱりアニワは氷の世界であったのだ。今朝出発してアニワの氷原で一休みして戻って帰ったのか、この様に一度偵察に行って来る群もある。考えて見れば、サハリン州アニワは外国であるが、クッチャロ湖からは、200kmほどもないのだからと思えば理解もできる。平成2年4月10日、クッチャロ湖より日本で最初の人工衛星で追跡し飛行ルート解明のため、4羽のコハクチョウ（雄3羽雌1羽）に発信器装着して放鳥した。個体それぞれに、番号とニックネームを付けて観察を続けた。紙面の都合で詳しくは書けないが、特長のある個体のみ発表する。放鳥後「01289」(89) 雄は4月21日朝まで連続観察したが夕方不明、人は見落したと思っていた。22日に再確認。引き続き4月29日まで確認できた。この21日夕方から22日の未明までの間に、国後島へちょっと350kmを一飛び往返した事になる。人工衛星の目には驚きであった。この年放鳥した4羽全て秋期には、不用になった発信器を落下させ渡来した。この確認は足に付けた番号で確かめた。人工衛星を利用したコハクチョウの渡り経路追跡調査は、研究協力団体(財)、日本野鳥の会（財)、山階鳥類研究所、日本白鳥の会、外4団体で行われた。各研究所にお礼申し上げる。平成5年4月、美唄市での日本白鳥の会研修会の折に、松井会長が南サハリンの白鳥の中継地調査の折に現地で案内をしてくれたサハリン州執行委員会狩猟経営面主任技師、ドリコフ・アンドレイ・イワノピッチ氏を招き、町、福祉センターにおいて講演会を開催して頂いた。この方は25年間も動物の調査と保護を仕事としているベテラン技師の様で、サハリンの白鳥の渡来地の状況を聞くと4月初旬はアニワの干潟は氷が被っているが下旬になると氷は無い。サハリンは5月に入ると、南から10日間隔で狩猟期に入る。白鳥は保護されているが、ガン、カモは猟鳥であると言っていたのが、ちょっと気掛かりであったが。寄らば大樹の陰と言れる通り白鳥のそばにはカモが来るため、白鳥が被弾するのも当り前の様な気がする。4羽の発信器を付けた白鳥が南サハリンに立寄らなかった訳も理解できる。クッチャロ湖もラムサール条約に指定されてから、北海道、環境庁にも特設の御高配を賜っている。水鳥の観察舎も建設され、厳冬期の野鳥調査も容易に出来る様になった。又、湖畔の一角に大規模な施設も建設中で明春完成の見込である。

おわりに

昭和48年6月東京四ツ谷の主婦会館で産声を上げた「日本白鳥の会」は紆余曲折もあった様だ。会の皆さんに多大な迷惑をお掛けしている不良会員の私が言えた義理ではないが、この折に20年を雑駁に顧りみた。日本各地の白鳥の仲間もでき、誰れもが白鳥を愛する人ばかりで本当に素晴らし会の会員になれた事に感謝している。又私個人、地域・浜頓別町において特段の御助言、御配慮を賜りました。

松井会長に心よりお礼を申し上げます。